

令和6・7年度「高等学校における通級による指導」
実践研究成果報告書

研究主題

「個々のニーズに応じた教育内容の改善と校内体制の見直し」

山梨県立中央高等学校定時制

校 長 中込 一成

担 当 者 保坂 瑞穂

江上 桐子

秋山 香江

山梨県甲府市飯田五丁目6-23

電話番号 055-226-4411

FAX番号 055-226-4420

I 学校概要

1 課程・学科別、男女別生徒数

		クラス	普通科		情報経理科	
			男	女	男	女
午前部	1年次	AA	4	8		
		AB	5	7		
	2年次	AA	3	5		
		AB	3	4		
	3年次	AA	4	5		
		AB	6	2		
	4年次	AA	2	3		
	合計			27	34	
科別合計			61			

		クラス	普通科		情報経理科	
			男	女	男	女
午後部	1年次	HA	4	5		
		HB	4	5		
		HC	4	5		
		HD			3	3
	2年次	HA	6	4		
		HB	6	4		
		HC	6	3		
		HD			6	3
	3年次	HA	5	3		
		HB	4	3		
		HC	5	4		
		HD	4	3		
		HE			2	10
	4年次	HA	3	5	2	
		HB	3	4	1	3
合計			54	48	14	19
科別合計			102		33	

		クラス	普通科		情報経理科		
			男	女	男	女	
夜間部	1年次	Y		1			
	2年次	Y		2	1		
	3年次	Y	1			1	
	4年次	Y		2		1	
	合計			1	5	1	2
	科別合計			6		3	

部別学科別生徒数	普通科		情報経理科		合計
	男	女	男	女	
午前部	27	34			61
午後部	54	48	14	19	135
夜間部	1	5	1	2	9
合計	82	87	15	21	205

2 教職員数

校	長	1
副	校 長	1
教	頭	1
教	諭	44
養	護 教 諭	1
会 計 年 度 任 用 職 員		12
実	習 助 手	1
事	務 長	1
副 主 幹 ・ 事 務 次 長		1
主	事	1
会 計 年 度 任 用 職 員		9
英 語 指 導 助 手		1
合	計	74

3 教育課程編成状況

R7入学生 午前部 普通科 必修 モデル案 (黄色:必修、青字:必修年次指定)

文系 4年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	
1年次	L H R	総合的な探究	現代の国語	言語文化	数学Ⅰ		化学基礎	体育Ⅰ	保健	英語CⅠ		
2年次			歴史総合	公共	科学と人間生活	体育Ⅱ	家庭基礎	情報Ⅰ	数学A	英語CⅡ		
3年次			地理総合	体育Ⅲ	文学国語		政経/生物基礎	日本史探究/世界史探究		数学B	論理・表現Ⅰ	
4年次			体育Ⅳ	音1/美1/書1	論理国語/日本史探究/世界史探究		数学Ⅱ		実用/英研	英Ⅲ/フード/情報処理		

文系 3年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	21・22	23・24	25・26	
1年次	L H R	総合的な探究	現代の国語	言語文化	数学Ⅰ		化学基礎	体育Ⅰ	保健	英語CⅠ		歴史総合	公共	体育Ⅱ	
2年次			地理総合	科学と人間生活	体育Ⅲ	家庭基礎	情報Ⅰ	生物基礎	数学A	英語CⅡ		文学国語/日本史探究	数学B/倫理		
3年次			体育Ⅳ	音1/美1/書1	論理国語/世界史探究		数学Ⅱ/生物		実用/政経/英研	英Ⅲ/フード/情報処理		国語表現/地理探究		論理・表現Ⅰ	

理系 4年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20
1年次	L H R	総合的な探究	現代の国語	言語文化	数学Ⅰ		化学基礎	体育Ⅰ	保健	英語CⅠ	
2年次			歴史総合	公共	生物基礎	体育Ⅱ	家庭基礎	情報Ⅰ	数学A	英語CⅡ	
3年次			地理総合	物理基礎	体育Ⅲ	数学B	数学Ⅱ		化学	論理・表現Ⅰ	
4年次			体育Ⅳ	音1/美1/書1	論理国語		数学研究	生研/英研	生物	化学研究	

理系 3年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	21・22	23・24	25・26
1年次	L H R	総合的な探究	現代の国語	言語文化	数学Ⅰ		化学基礎	体育Ⅰ	保健	英語CⅠ		歴史総合	公共	体育Ⅱ
2年次			地理総合	生物基礎	物理基礎	体育Ⅲ	家庭基礎	情報Ⅰ	数学A	英語CⅡ		数学Ⅱ		数学B
3年次			体育Ⅳ	音1/美1/書1	数学研究	生研/英研	生物	化学研究	化学	物理/論理国語		倫理/論・表Ⅰ		

R7入学生 午後・夜間部 普通科 必履修 モデル案 (黄色: 必履修、青字: 必履修年次指定)

午後部普通科 4年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	
1年次	L H R	総合的な探究	現代の国語	言語文化	数学Ⅰ		化学基礎	体育Ⅰ	保健	英語CⅠ		
2年次			歴史総合	公共	体育Ⅱ	家庭総合		情報Ⅰ	数学A	英語CⅡ/英基・生物基礎OR科人		
3年次			地理総合	科学と人間生活	体育Ⅲ	音Ⅰ/美Ⅰ/書Ⅰ	文学国語		数学Ⅱ/日本史探究	論理・表現Ⅰ		
4年次			体育Ⅳ	国語表現/化学/倫理・実書		世界史探究/地理探究/フード		実用英語		実用国語	音Ⅱ	

午後部普通科 3年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	21・22	23・24	25・26	
1年次	L H R	総合的な探究	現代の国語	言語文化	数学Ⅰ		化学基礎	体育Ⅰ	保健	英語CⅠ			歴史総合	公共	体育Ⅱ
2年次			地理総合	体育Ⅲ	音Ⅰ/美Ⅰ/書Ⅰ	家庭総合		情報Ⅰ	数学A	英語CⅡ/英語基礎・生基		文学国語	科学と人間生活		
3年次			体育Ⅳ	数学Ⅱ/日本史探究		国語表現/化学/倫理・実書		世界史探究/地理探究		論・表Ⅰ/実用	音Ⅱ	日本史探究/フードデザイン		生活産業基礎	

夜間部普通科 4年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	
1年次	L H R	総合的な探究	現代の国語	言語文化	数学Ⅰ		化学基礎	体育Ⅰ	保健	英語CⅠ		
2年次			歴史総合	公共	体育Ⅱ	家庭総合		情報Ⅰ	数学A	英語CⅡ/英語基礎・科人		
3年次			地理総合	科学と人間生活	体育Ⅲ	数学B	文学国語		数学Ⅱ/倫理・生物基礎	論理・表現Ⅰ		
4年次			体育Ⅳ	音Ⅰ/美Ⅰ/書Ⅰ	国語表現		世界史探究/化学		政治経済	日本史探究/フードデザイン		

夜間部普通科 3年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	21・22	23・24	25・26	
1年次	L H R	総合的な探究	現代の国語	言語文化	数学Ⅰ		化学基礎	体育Ⅰ	保健	英語CⅠ			地理総合	公共	体育Ⅱ
2年次			科学と人間生活	体育Ⅲ	音Ⅰ/美Ⅰ/書Ⅰ	家庭総合		地理総合	数学A	英語CⅡ/英語基礎・生物基礎		文学国語	情報Ⅰ		
3年次			体育Ⅳ	実用国語	政治経済	国語表現/数B・論理表現Ⅰ		世界史探究/化学		数学Ⅱ/日本史探究/フード	地理探究		音美Ⅱ/美術Ⅱ		

R7入学生 午後・夜間部 情報経理科 必履修 モデル案 (黄色: 必履修、青字: 必履修年次指定)

午後部 情報経理科 4年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	
1年次	L H R	総合的な探究	言語文化	公共	数学Ⅰ		体育Ⅰ	保健	ビジネス基礎	簿記		
2年次			体育Ⅱ	英語CⅠ		家庭総合		情報処理		簿記研究		
3年次			現代の国語	地理総合	歴史総合	化学基礎	体育Ⅲ	財務会計		ソフトウェア活用		
4年次			科学と人間生活	体育Ⅳ	音Ⅰ/美Ⅰ/書Ⅰ	課題研究	総合実践	マーケティング	ビジネスC/地理探究	原価計算/商品開発・ビジネス法規		

午後部 情報経理科 3年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	21・22	23・24	25・26	
1年次	L H R	総合的な探究	言語文化	公共	数学Ⅰ		体育Ⅰ	保健	ビジネス基礎	簿記			歴史総合	化学基礎	体育Ⅱ
2年次			体育Ⅲ	英語CⅠ		家庭総合		情報処理		簿記研究		地理総合	科学と人間生活		公共
3年次			音Ⅰ/美Ⅰ/書Ⅰ	体育Ⅳ	課題研究	財務会計/世界史探究・地理探究	ソフトウェア活用		総合実践	プログラミング/ビジネスC		倫理	原価計算/商品開発・ビジネスC		

夜間部 情報経理科 4年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	
1年次	L H R	総合的な探究	現代の国語	言語文化	数学Ⅰ		体育Ⅰ	保健	ビジネス基礎	簿記		
2年次			歴史総合	公共	体育Ⅱ	英語CⅠ		情報処理		簿記研究		
3年次			地理総合	科学と人間生活	体育Ⅲ	家庭総合		財務会計Ⅰ/数学Ⅱ・日本史探究		ソフトウェア活用		
4年次			化学基礎	体育Ⅳ	音Ⅰ/美Ⅰ/書Ⅰ	課題研究	総合実践	マーケティング	ネットワーク活用	原価計算/文学国語/世界史探究		

夜間部 情報経理科 3年卒

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	13・14	15・16	17・18	19・20	21・22	23・24	25・26
1年次	L H R	総合的な探究	現代の国語	言語文化	数学Ⅰ		体育Ⅰ	保健	ビジネス基礎	簿記		化学基礎	歴史総合	体育Ⅱ
2年次			音Ⅰ	公共	体育Ⅲ	英語CⅠ		情報処理		簿記研究		家庭総合		地理総合
3年次			科学と人間生活	体育Ⅳ	総合実践	財務会計Ⅰ/数学Ⅱ・日本史探究	ソフトウェア活用		マーケティング	ネットワーク活用	課題研究	ビジネス法規	商品開発と流通	

1 教育課程に加える



2 教育課程の一部に替える



※「通級による指導」について

通常的时间割とは別に実施する「教育課程に加える」形と、当該生徒の選択科目との調整により、通常的时间割内で実施する「教育課程の一部に替える」形の二つがある。

Ⅱ 研究成果の要旨

1 研究のねらい

本校は、午前部・午後部・夜間部を併設する定時制課程の単位制高校である。高等学校における「通級による指導」が制度化された平成30年度より本校でも取組を開始し、今年度で8年目を迎える。「通級による指導」の中心を担う教育相談部では、令和5年度末の人事異動等により、1名を除きスタッフの入れ替えが生じた状況の中で、本研究がスタートした。そこで、これまで本校が積み重ねてきた「通級による指導」の実践の良さを継承しつつ、近年多様化する生徒の実態に即した指導の在り方について、改めて検討を行うこととした。「通級による指導」にとどまらず、LHRや総合的探究の時間等との関連も視野に入れながら、支援の広がり意識した取組を進めるため、「広げる」をテーマとして研究に取り組む。

本校には、対人関係や感情のコントロールに困難を抱える生徒、外国にルーツをもつ生徒、家庭環境が複雑な生徒など、多様な教育的ニーズを有する生徒が在籍している。「通級による指導」は学校設定科目「社会探究」として実施しており、履修を希望する生徒は、自身の課題を自覚し、改善を目指して主体的に学習に取り組んでいる。こうした生徒への支援には、授業内容や学習状況等について、担任をはじめとする教職員および家庭との継続的かつ具体的な情報共有が不可欠である。生徒の実態把握を通して、多くの生徒に共通する困難さと、それに対する個々なりの対処方略が存在することが明らかとなった。これらの考え方を整理し、汎用的に活用できるよう支援を行う必要があると考えられる。一方で、「通級による指導」の趣旨や実践内容について、校内全体での理解を一層促進するため、体制の見直しも課題である。以上の点を踏まえ、本研究の主題を設定した。

2 研究体制・組織・概要

(1) 通級委員会

通級委員会は、校長、副校長、教頭、事務長、教務主任、教育相談主任、教育相談副主任、教務主任、生徒指導主事、進路指導主事、年次主任にて構成される。「通級による指導（社会探究）」を履修する生徒の決定、指導の開始・中断・終了の判断および単位認定を行う。

(2) 教育相談係

ア 履修者の決定

R7年度からは次のような流れで履修者を決定している。6月、生徒全員に対し「通級による指導（社会探究）」および「お試し通級」の案内を配付する。初めて「通級による指導」を希望する生徒については、「お試し通級」への参加を必須とし、履修の可否を判断するための資料の一つとする。その後、通級委員会において履修者を決定し、職員会議で承認を受ける。決定した履修者については、翌年度の履修指導（9月）において担任と連携し、同一講座を履修する生徒間の相性にも配慮しながら時間割を編成する。

イ 「社会探究」学習プログラムの提案

「通級による指導（社会探究）」で用いる学習プログラムについては、既存のプログラム（平成30年度より使用、桜美林大学心理・教育学系小関俊祐研究室と協働開発）で十分に扱われていない分野や、活動を伴う内容を含め、様々な生徒の状況や教育的ニーズに対応できるよう、多様な学習プログラムの開発及び提案を行う。

ウ 生徒の実態把握アンケート等の実施

保護者に対しては、入学予定者保護者を対象としたアンケートを実施し、新入生については、生徒の実態把握を目的としてTK バッテリー検査を行っている。これらの結果は、担任や年次に資料として提供するとともに、必要に応じて生徒指導支援会議（年5回開催）において共有している。また、全職員を対象に「生徒の学習・行動・対人関係への『気づき』調査」を実施し、その結果についても生徒指導支援会議の資料として活用している。

(3) 研究の概要

平成30年度から実施してきた「通級による指導」を振り返り、その成果と課題を整理する。あわせて、個別の教育支援計画を含め、「通級による指導」実施に至る一連の流れを明確化する。また、「通級による指導（社会探究）」における学習プログラムの検討・開発および整理を行い、職員間で共有可能な形に整える。さらに、全職員を対象とした特別支援教育に関する研修会を実施する。以上の取組を通して、本研究を進める。

3 研究実践の内容と成果

ア これまでの「通級による指導」の振り返り

本校でこれまで使用してきた既存の学習プログラムは17であり、自立活動区分の「2 心理的安定」および「3 人間関係の形成」、次いで「6 コミュニケーション」を中心に構成されている。これらは、高等学校における「通級による指導」で取り上げる自立活動区分と

して概ね適切であると考えられる。

一方で、既製の学習プログラムが、生徒の多様化する教育的ニーズに十分対応しているとは言い難い側面もある。また、全体として、自己の考え方や認知に関わる自己理解を中心とした学習活動が多くなっている。

本校の生徒の多くは、自分の考えを深めたり言語化したりすること、また抽象的な内容を理解することに困難さを抱えている。このような実態を踏まえると、自己認知を直接的に問う学習内容を指導することは必ずしも容易ではないといえる。「社会探究」は、苦手なことを克服する場ではなく、困難な状況を乗り越えるための本人なりの方策を身に付ける場である。そのため、学習そのものが生徒にとって過度な負担となることは避ける必要がある。こうした考えのもと、これまでの実践を振り返りながら、生徒の実態に即した新たな教材の開発に取り組んできた。

イ 令和6年度の実践、成果と課題

本研究において行った実践は、①授業の流れづくり、②複数教員による授業実施における連携、③担任および年次との連携、④「通級による指導」を開始する時期の検討、⑤教材の作成、⑥通級生の保護者との面談、⑦個別の教育支援計画および個別の指導計画の整理、⑧学校全体への周知、⑨放課後 SST の実施の 9 項目である。

a 生徒の現状とニーズの把握

R6 年度の「社会探究」履修者は 19 名であり、発達障害の診断を受けていない生徒も含まれるが、精神障害者保健福祉手帳を所持している生徒は 2 名である。生徒の多くは、自身の気持ちを他者に伝えることが苦手であり、人の話を聞くよりも自分の話を優先する傾向や、対人距離の把握が難しいこと、考え方が極端で思い込みが強いこと、整理整頓や感情のコントロールに課題を抱えているといった特徴が見られる。一方で、それぞれが困難に対処する力を有しており、基本的に素直な姿勢をもつ生徒が多いことから、教員による適切な支援により、その力を十分に発揮できると考えられる。また、年度途中ではあったが保護者面談を実施し、保護者の願いやこれまでの生育状況等について詳細な聞き取りを行うことができた。

表 1 【R6 年度「通級による指導」履修生徒数】

	4年次	3年次	2年次	1年次	合計
午前部	2	2 (1)	4 (1)		8 (2)
午後部	1 (1)	1	2 (2)	4 (1)	8 (4)
夜間部			1	2	3
合計	3 (1)	3 (1)	7 (3)	6 (1)	19 (6)

※1年次と午前部2年次の1名は転入生のため後期からスタート

() 内の数は、個別の教育支援計画を中学校から引き継いだ生徒数

b 「通級による指導」の流れの整理

本校は単位制を採用しており、翌年度の時間割は 9 月の履修指導において決定している。

これまで、2年次以上の生徒全員に対して、12月の三者懇談の機会を通じて「通級による指導」についての案内を行い、希望者を募った上で履修者を決定してきた。そのため、一度決定した時間割に対し、後から「社会探究」を追加または変更する必要が生じることが多く、時間割の調整が課題となっていた。

また、新入生に対しては、6月に案内を配付し、7月の三者懇談において希望者を募り、後期（10月）から時間割に「社会探究」を追加して実施してきた。しかし、入学後間もない段階では、「通級による指導」の必要性を十分に見極めることが難しいことに加え、通級希望者が予想を上回った結果、授業を担当する教員の持ち時間や施設・設備の確保において課題が生じた。

これらの状況を踏まえ、R7年度からは履修対象を2年次生以降とし、全生徒に対して6月に案内を行い、7月の三者懇談で希望を募る方法に統一した。

c 「社会探究」授業の実際

本校の「社会探究」では、原則として生徒2名に対し教員2名で授業を担当している。授業は他の科目と同様、2時間連続で実施している。内容は、①1週間の振り返り、②プログラムの実施、③個々の生徒の状態に応じた支援の3点を柱として構成している。

本校では通級専任の教員を配置しておらず、毎年4月の教員配置決定後、教務から各教科に時間が割り振られ、教科内で話し合いの上、担当者を決定している。授業を教員2名で担当するのは、記録作成や生徒の反応の客観的な把握、コミュニケーションスキルのモデル提示、生徒および教員の安全確保、ならびに不適切な発言や言動の防止を目的としている。発達障害等の特性により発言が誤解される可能性もあることから、複数教員による対応は不可欠であると考えられる。

d 授業の流れづくり

授業にあたっては、次の7点を基本的な配慮事項としている。第一に、生徒の話を聴く際には、基本的に傾聴し、共感的に受け止めること。第二に、助言は必要に応じて行うこと。第三に、肯定的な姿勢で生徒と向き合い、「否定」ではなく「よりよい選択につながる提案」を意識した関わりを行うこと。第四に、「どう思うか」と問いかけ、生徒自身の考えを引き出すことを重視し、教員が一方的に話し過ぎないように留意するとともに、生徒2名の発話のバランスにも配慮すること。第五に、簡潔な発言であっても生徒の表現を尊重し、共感的に受け止めること。第六に、生徒が言語化に困難を示す場合には、複数の選択肢を提示するなどして、表現を支援すること。第七に、生徒への評価やフィードバックは具体的に行い、行動や発言のどの点がよかったのかを明確に伝えるとともに、教員自身の気持ちも言葉にして伝えることを心がけている。

また、毎回の授業の冒頭には振り返りの時間を設けている。まず個別に発表内容を整理し、その後グループに戻って一人ずつ発表を行い、質問を交えながら話し合いを進めている。この振り返りを通して、生徒が自分の気持ちを他者に伝える経験を積むことや、相互の質問を通じてコミュニケーション力を育成すること、さらに生徒の現状や課題を把握す

ることが期待される。

振り返りにおいては、一定の枠組みを設けることを重視している。枠組みがない場合、生徒の発言が長時間に及んだり、思考が一方向に偏ったりする可能性があるためである。生徒が安心して自由に話せる雰囲気を大切にしつつ、教員が全体を調整・統制することで、その時点で生徒に必要な支援や視点を把握し、次の教材や指導内容へとつなげることを意識している。

e 振り返りの活用

授業の最初に毎回振り返りを行っている。具体的には、個別に分かれて発表する内容を教員と共に整理し、グループに戻り一人ずつ発表する。その後、質問をしながらその話題について話し合う。この振り返りによって、①生徒が自分の気持ちを人に伝える場になる。②質問をし合うことで、コミュニケーション力向上の一助となる。③生徒の現状を把握することができる。などが期待できる。

ここで大切なことは、枠組みをしっかりとしておくことである。生徒たちは話を聞いてもらいたいため、枠組みがないといつまでも話してしまうことや、一人で勝手にネガティブな方向になりかねない。生徒にのびのびと話をさせつつ、教師側で引っ張っていくことが重要である。その中で「今、その生徒に必要なこと」を把握し、教材として取り上げることが大切に行っている。

f 令和6年度の振り返り

課題として、次の3点が挙げられる。第一に、担任および年次との密な連携を図ることである。これは、生徒情報の共有を進めるとともに、「社会探究」における学習内容の般化を目指し、生徒の状況を学習プログラムに的確に反映させることにつながる。第二に、特別支援教育等に関する研修会の実施である。特別な支援を必要とする生徒は年々増加しており、本校においては、すべての教員が担当者となり得ることから、毎年全職員を対象とした研修を行う必要があると考える。第三に、多様な授業プログラムの開発および周知である。現行のプログラムでは十分に扱われていない分野や活動を伴う内容など、様々な生徒の状況に対応できるプログラムを準備し、その内容を周知することで、LHR等においても柔軟に活用できるようにしていきたい。

ウ 令和7年度の実践

a 「社会探究」履修者の状況

表2【R7年度「通級による指導」履修生徒数】

R7年度の「社会探究」履修者は13名であり、そのうち中学校から個別の教育支援計画を引き継いだ生徒は3名である。また、4年次生の1名を除く12

	4年次	3年次	2年次	合計
午前部		3 (1)		3 (1)
午後部	2	1 (1)	4 (1)	7 (2)
夜間部		1	2	3
合計	2	5 (2)	6 (1)	13 (3)

※ () 内の数は、個別の教育支援計画を中学校から引き継いだ生徒数

名が継続して履修している。

令和7年度より、1年次生後期における「社会探究」の履修は実施していない。この変更に伴い、新入生のうち継続的な支援を必要とする生徒に対しては、「お試し通級」や「放課後SST」を活用し、切れ目のない支援体制を確保する方針とした。

「社会探究」履修を希望する生徒は、診断名の有無や手帳の所持状況など、多様な背景を有している。そのため、個々の生徒に対し「通級による指導」が必要であるか否かを適正に判断することは容易ではない。そこで、初めて履修を希望する生徒については、「お試し通級」への参加を必須とし、その観察結果を履修可否を検討する際の重要な資料として活用することとした。

講座受講者については、通級委員会における審議を経て決定し、その後、職員会議において最終確認を行っている。受講が認められた生徒は、9月の履修指導において時間割に「社会探究」を選択することとなる。その際には、どの時間帯の通級を設定するかについて、担任および教務と連携し、生徒間の組み合わせ等を考慮しながら適切に調整を行っている。

令和7年度新入生で、中学校より個別の教育支援計画を引き継いだ生徒は午前部2名、午後部6名の計8名である。このうち、来年度「社会探究」を履修する予定の生徒は、午前部1名、午後部1名の計2名である。

表2・3が示すように、本校で

「お試し通級」参加者募集

中央高校では、「社会探究」という科目で通級による指導を行っています。次のようなことで困っている人は、ぜひ参加してみてください。

- ・友達とうまく関われない
- ・勉強に集中することができない
- ・特定の科目の勉強ができない
- ・すぐにイライラしてしまう
- ・ものごとの優先順位がつけられない
- ・急な変化や予定外のできごとがとても不安



※来年度の「社会探究」の履修者は、9月の通級委員会で決定します。初めて「社会探究」を希望する人は、3回ある「お試し通級」のうち、必ず1回は参加してください。

	日にち	時間	申し込み〆切
第1回「お試し通級」	6/18(水)	午前部 12:40~13:10	6/11(水)
第2回「お試し通級」	7/9(水)	午後部・夜間部 16:50~17:20	7/2(水)
第3回「お試し通級」	8/27(水)		8/22(金)

場所 カウンセリングルーム1

「お試し通級」への参加を希望します。

クラス() 番号() 氏名()

参加希望日(いずれかに〇をつけてください)

6/18・7/9・8/27

お試し通級を希望する理由を簡単に書いて、担任の先生へ提出してください。

図1【「お試し通級」案内】

表3【R7年度新入生、個別の支援計画引き継ぎとR8年度「通級による指導」履修生徒数】

	個別の指導計画を引き継いだ生徒	R8年度社会探究を履修する生徒
午前部	2	2(1)
午後部	6	3(1)
夜間部	0	0
合計	8	5(2)

※()内の数は、個別の教育支援計画を中学校から引き継いだ生徒数

「社会探究」を履修する生徒の多くは、中学校から個別の教育指導計画を引き継いでいない。そのため、新たに個別の教育支援計画を作成する必要がある。そこで、「社会探究」を初めて履修することが決まった生徒については、現担任が本人および保護者から作成に係る同意を得たうえで個別の教育支援計画を作成し、次年度の新担任へ引き継ぐ体制とした(図2)。

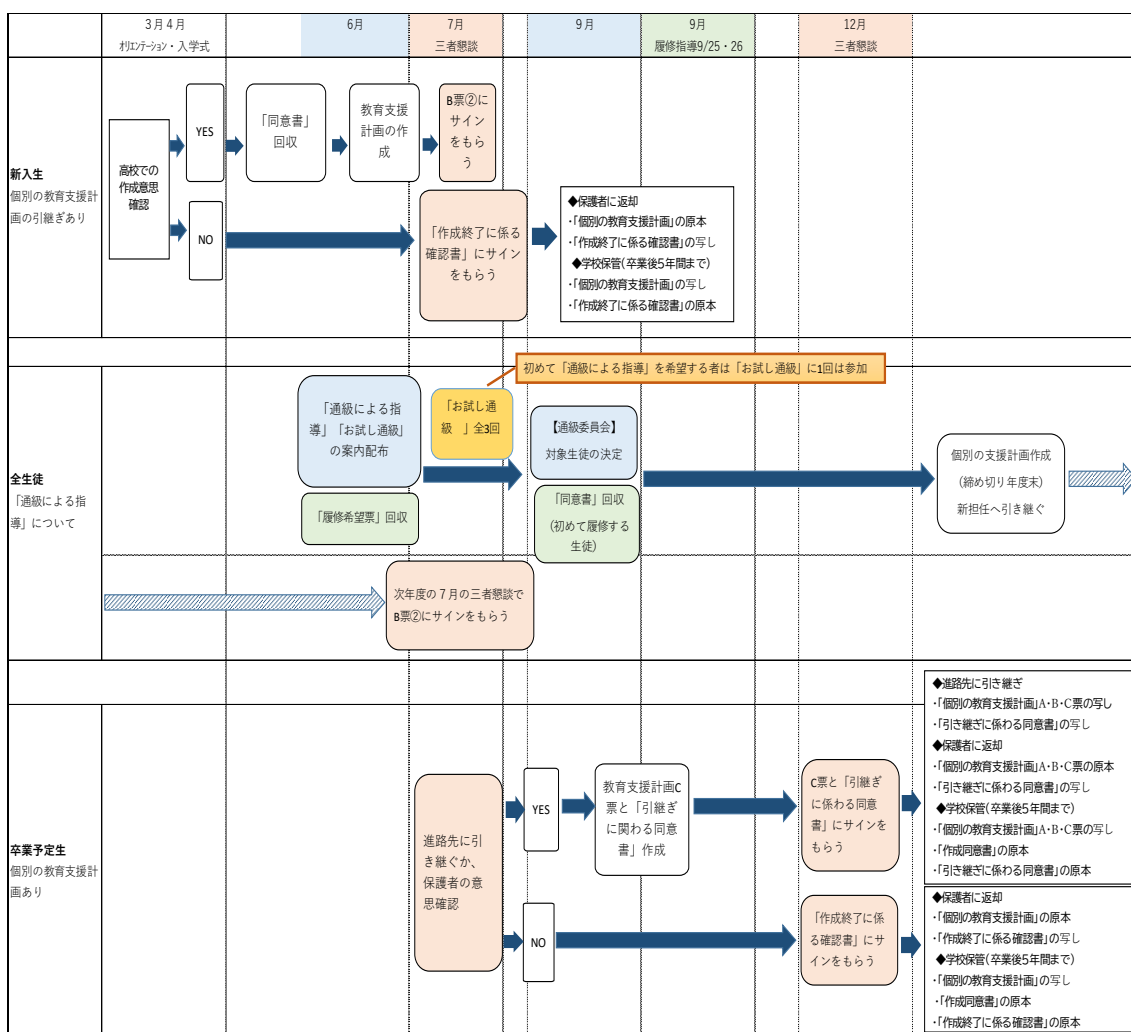


図2 【「個別の教育支援計画」作成に関する流れ】

b 校内研修会の実施

本校では、年間5回開催している生徒指導支援会議をミニ校内研修会として位置付け、各回で必要な資料共有や研修要素を取り入れてきた。

4月7日(月)の第1回会議では、発達障害の特性や配慮の具体例、二次的な障害に関する資料を配付した。8月19日(火)の第3回会議では、全教職員による生徒の学習・行動・対人関係に関する「気づき」調査の結果を提示し、そこから考えられる支援内容について具体的な資料を共有した。10月2日(木)の第4回会議では、合理的配慮に関する資

料を配付し、理解の促進を図った。

さらに、8月5日(火)の学校全体研修会では、山梨大学教育学部・やまなし小学校教育講座の田中健史朗准教授を講師としてお招きし、「エビデンスに基づく援助者に必要な3要因」をテーマに、心理的援助の効果に影響する①支援目標の合意形成・協働、②共感、③協力的で良好な関係づくりについて講義をいただいた。

c 学習教材の開発と共有

「社会探究」で実施しているプログラムは、ワークシートを基盤とした話し合い活動を中心に構成している。本校の生徒の多くは、「自分の考えを他者に伝える」経験が十分でなく、人間関係における困難やつらい体験から、自信の欠如や発言に対する不安を抱えている傾向が見られる。そのため、「自分の感じたことを相手に伝える」ことを重視した学習内容が、本校生徒の実態に適していると考えられる。

また、授業で行う振り返りでは、生徒が示した言動や発言内容を拾い上げ、次回以降の教材作成に反映している。特に、「今、その生徒にとって必要なことを教材として扱う」ことを重視し、生徒の実態に応じた柔軟な教材開発を行っている。開発したワークシートは、LHR や総合的な探究の時間等でも活用できるように共有フォルダにおいている。

いくつかの教材を紹介する。

「わたしはこんな人です！」自己紹介 (自己理解・他者理解)

本活動は、年度当初に実施する導入的取組である。生徒には、ワークシートの空欄を記入したうえで、その内容を台本として読み上げる形式をとっている。初回授業では、生徒が緊張しやすく、また人前で話すことに苦手意識をもつ場合が多いことから、台本を用いることで負担を軽減し、発表に取り組みやすい環境を整えることを目的としている。

さらに、この活動を通して、生徒が普段の授業では見せない反応やコメントを得ることができる。特に、発言の中で見られた良いリアクションや有益なコメントについては記録し、担

わたしはこんな人です！

1. わたしの名前は_____です。
_____と呼んでください。
クラスは_____です。
2. 生まれた月は_____月です。
3. 好きな食べ物は_____です。
苦手な食べ物は_____です。
4. 今、はまっていることは_____
_____です。
5. 好きな色は_____です。なぜかというと、
_____だからです。
6. 好きな季節は_____です。なぜかというと、
_____だからです。
7. 犬派か猫派といわれたらどちらかというと_____です。
8. 好きなテレビ番組は_____です。
9. 好きなアニメは_____です。
10. 中央高校で_____

ことをがんばろうと思っています。
よろしくお願いします。 何か質問はありますか？

図3 【ワークシート「わたしはこんな人です！」】

その他の教材

これらの教材の多くは、生徒の実態に即して作成したものである。近年は SST (ソーシャルスキルトレーニング) に関する書籍が多数刊行されており、そのまま使用可能なものも存在する。しかし、示されているシチュエーションが本校生徒の実態に合致しなかったり、表現のニュアンスが実際の場面と異なったりすることも少なくない。そのため、書籍は参考資料として活用しつつ、生徒の状況に適した内容へとアレンジした教材を作成するようにしている。こうした書籍は、題材のヒントとして有用であり、教材開発において大いに役立っている。

前述のとおり、教材は生徒一人ひとりの実態に応じて作成しているため、種類が年々増えているものの、整理が十分に進んでいないのが現状である。今後は、教材を種類別や時期別に体系化し、どの教員が担当しても分かりやすく活用できるよう、整理と共有の枠組みを整備していく必要があると考えている。

- 8時過ぎて何時
- きっかけ言葉を考えよう
- ネゴシエーターゲーム
- わからないことを聞かれたら
- わたしは誰でしょう
- 伝え方が大事
- 今言うべきか、言わないべきか
- 本当は違うんだけど
- パーソナルスペース
- お悩み相談室
- わたしの怒り・イライラのパターン
- 感情の整理が上手な人になる
- 生活の中で優先順位をつけよう
- 川を渡る女
- 人生お金が一番大事だ
- 見えない気持ちについて考えよう
- ささやかだけど役に立つ言葉
- 自分と相手はどちらが大事？

図6 【その他のワークシート】

d 事例紹介

事例① Aさん

〈本人の困り感〉 見通しが立たない状況に強い不安を抱く。やるべきことの優先順位をつけることが苦手で、3つ以上のタスクが重なると混乱しやすい。急な予定変更が負担となり、身の回りの整理整頓も難しい。自身が納得するまで考え方を変えにくい面もある。

〈本人の強み〉 学習成績は優秀で、自己理解も一定程度できている。律儀で真面目な性格であり、語彙が豊富なため、自分の考えを適切に言語化できる。また、他者の話にしっかり耳を傾けることができる。

〈具体的な支援〉

● **個別支援** 定期的にやるべきことをリスト化し、優先順位を一緒に検討する。気持ちが安定した際には情緒の整理を行う。生活上必要なスキル（電話応対、文章表現など）の習得も支援する。

● **小集団支援 (2~4名)** さまざまな SST を通し、「人には多様な考え方がある」ことを理解できるよう働きかける。生徒同士のやり取りを促し、リラックスできる時間も設けている。

本人と関わる際は、まず考え方の特性に寄り添うことを重視した。さらに、本人の発言や考えを否定せず、共に整理しながら考える姿勢を大切に。取り組みはスモールステップで評価し、段階的に進めるよう配慮した。

〈成果として見られる変化〉 考え方が以前より柔軟になり、物事の見通しを持てるようになってきた。自ら課題を解決する場面が増え、表情も柔らかくなった。他者に相談できるようになり、関わりの幅も広がっている。

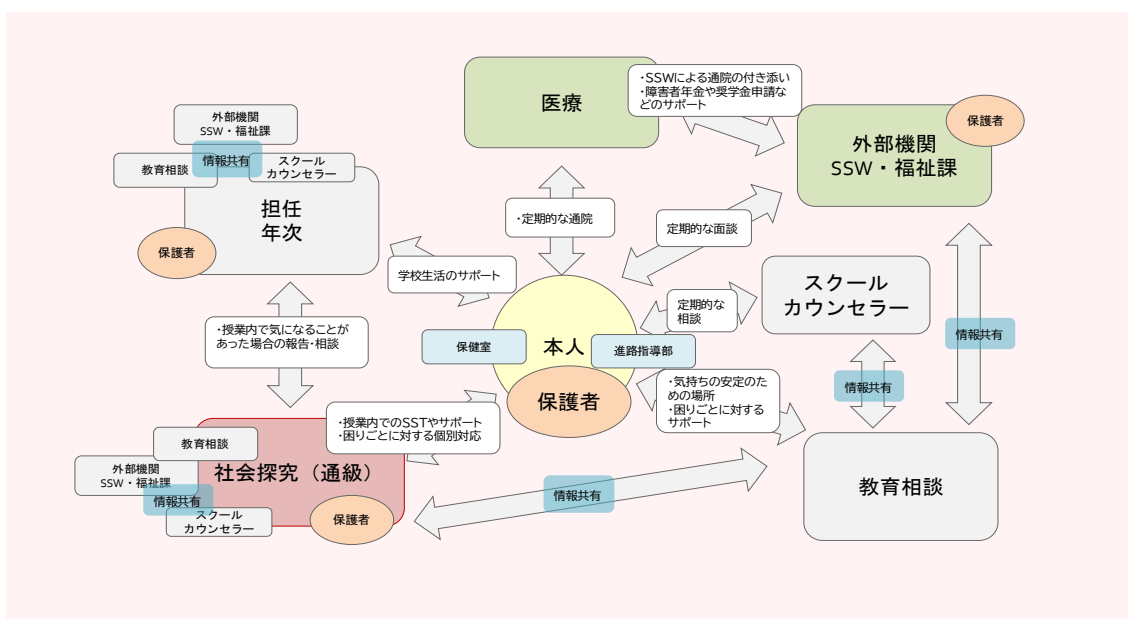


図7 【Aさんの支援体制】

事例② Bさん

〈本人の困り感〉 落ち着いて行動することが難しく、指示された内容を忘れてしまうことがある。また、場の雰囲気を読み取りにくいいため、会話に割り込んでしまう場面が見られる。授業中に集中を保つことが難しく、作業的な活動では取り組みがうまく進まないこともある。さらに、人との距離感の取り方がつかめずトラブルにつながることもあるほか、自分の気持ちをうまく言葉にして伝えられない。物事を自分のやり方で進めてしまう傾向も見られる。

〈本人の強み〉 明るく前向きな性格で、素直さが感じられる。また、困っている人を見かけると自然に手を差し伸べようとする優しさを備えている。

〈具体的な支援〉

- 個別支援 トラブルが生じた際には、その状況を丁寧に振り返り、不安定になったと

きには気持ちの整理を一緒に行った。また、日常生活で必要となるスキル（伝え方・行動など）についても個別に支援した。

● 小集団支援（2～4名） 様々なSSTを通して「人には多様な考え方がある」ことを学べるよう働きかけた。生徒同士のちょっとしたやり取りを促し、安心して過ごせるようリラックスタイムも取り入れた。

本人と接する際には、何よりも話を丁寧に聴き、考えや感じたことを否定しない姿勢を大切にした。トラブルが続いた時期には、個別対応の時間を十分に確保し、振り返りを丁寧にを行うことを心がけた。

〈成果として見られる変化〉 考え方の幅が広がり、以前より柔軟に物事を捉えられるようになってきた。状況を先読みして見通しをもてるようになり、困ったときには周囲に相談できるようになった。また、一呼吸置いてから行動できる場面も増えている。

12月頃からは落ち着いた様子が見られ、穏やかに過ごせる日が増えてきた。行動の前に立ち止まって考えることができるようになってきた点も大きな変化である。こころのサポートルームとの連携も、本人・保護者・学校にとって大きな支えとなった。

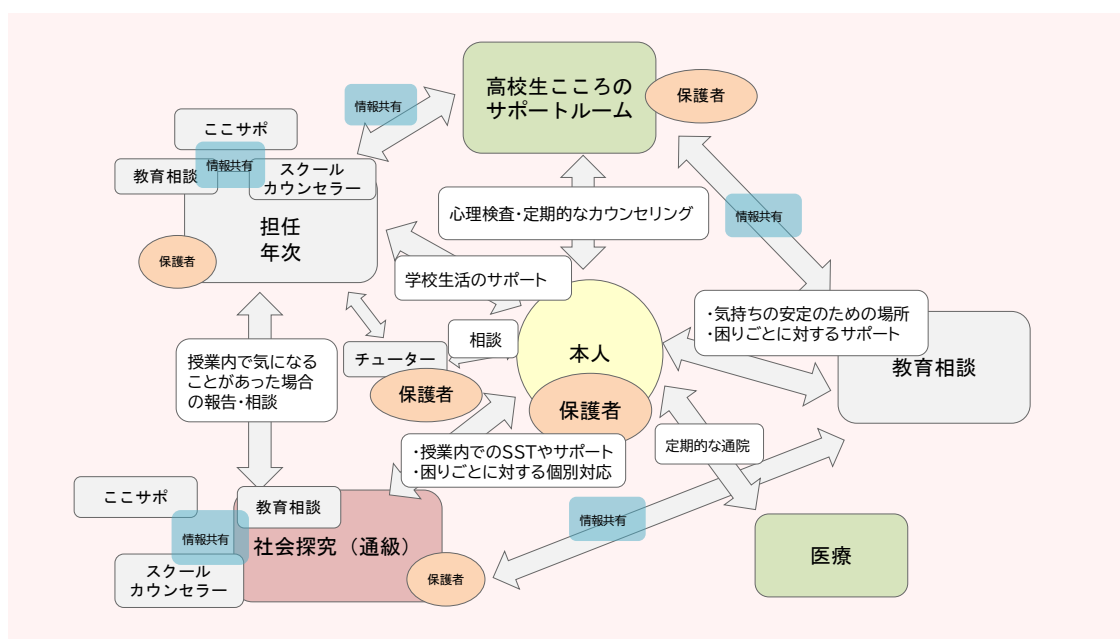


図8 【Bさんの支援体制】

4 今後の課題

本研究では、多様な教育的ニーズをもつ生徒一人ひとりの実態を的確に把握し、その状況に応じた教育内容の改善を進めることを目的として取り組んできた。具体的には、「通級による指導（社会探究）」における学習内容や指導方法について、生徒の特性や困難さに合

った柔軟な在り方を検討し、教材や授業構成の見直しを行った。

また、通級で得られた生徒理解や支援の視点を、担任・年次・関係教職員間で共有し、LHRや総合的な探究の時間など、学校全体の教育活動へと有機的に結び付ける校内体制の構築を目指した。

■ 教員体制

通級を担当する教員は、年度初めに教務から教科へ割り振られる時数に基づいて決定される。担任や教科指導の兼務に加え、3部制で勤務時間も多様であるため、今年度の担当者が次年度も継続して担当することは難しいのが現状である。通級指導を安定して継続するためには、主となる担当者は一定の経験を有する教員とし、最低1名は数年間継続して配置する体制が必要だと考えられる。こうした教員体制について、学校全体で検討していく必要がある。

■ 教材

誰が担当しても理解しやすく使いやすい指導計画を整備することが求められる。現在はその整備の途上にあり、来年度以降、より体系的に取り組んでいきたい。

■ 共通認識

「通級による指導」は、あくまで「学校全体の支援体制の一部」という認識が重要である。通級が単独で生徒支援を担うのではなく、学校全体で適切な支援を行う中で、通級がどのような役割を果たすのかを校内で共有していくことが大切である。

本校では、日頃から「通級による指導」を中心に、特別支援教育への理解と協力を得ながら取り組みを進めてきた。今後も必要に応じて関係部署と連携を図りつつ、日々の実践を積み重ねることで、生徒一人ひとりに適切な支援を提供していきたい。それが、通級対象の生徒だけでなく、すべての生徒にとってより良い学校生活の実現につながると考えている。

■ まとめ

高等学校における「通級による指導」は、その学校の特色や生徒の状況、校内体制に応じて運営されるべきものである。学校独自の工夫を生かしつつ、学校全体として取り組みを進めることが重要である。今後も、特定の場面だけに限られた支援にとどまらず、学校生活全体を通じた継続的かつ組織的な支援の充実を図っていきたい。

5 その他

特になし